

よみがえ

## 甦るカイチュウ

日本は温暖多湿で肥沃であったから、古くから土に親しむ農業が営まれ、カイチュウなどの土壤伝播寄生虫病が国民の間で流行していた。

カイチュウは、昔から「ハラノムシ」とか「オナカノミミズ」などとよばれ、日本人とカイチュウとのあいだには深い関係があったことがうかがわれる。江戸時代では、日本人のカイチュウ寄生率は70%以上と考えられ、国民のあいだにカイチュウが異常に蔓延していたことが推察される。

その後、カイチュウ症は第二次世界大戦直後まで日本国民のあいだに流行し続け、国民病と呼ばれた。しかし、その後、寄生虫撲滅対策、化学肥料の使用、農作業の機械化、衛生事情の好転など、いろいろな要因が日本の寄生虫感染の急速な減少をもたらし、感染してる人が全くいなくなるほど低下した。

ところが、最近急にカイチュウの流行が再燃してきた。有機肥料として人糞尿が使用されてきたこと、輸入野菜が増えてきたこと、国際交流の波に乗って、外国人が多数日本国内に入国したり、邦人の海外への出入りが頻繁になったりしたことなど、カイチュウ症増加の要因はいくつも数えられる。

しかし、なぜこのように近代化され、衛生環境が完璧に近い日本で、しかもごく短期間でカイチュウが再び甦ってきたのか？

それは、カイチュウの生物としての生き方にあると考えられる。

カイチュウは「子孫を残すためだけ生きる」。

カイチュウばかりでなくすべての寄生虫はもっぱら「いかにして次代に子孫を残すか」ということばかりを考えて生きているのだ。

全日本国民がいっせいに徹底的に寄生虫をなくしてしまった結果、医師はもちろん、臨床検査技師も寄生虫をまったく知らない現在の状況をつくってしまった。若いお母さんたちも、自然食に目の色を変えるが、野菜をよく洗う、幼児が食べるものによく火を通す、家族の手洗いを励行する、などのあたりまえの寄生虫予防の知識がなくなってしまった。その結果、「やさしい虫」の代表であるカイチュウの反撃が最近急にみられるようになってきたのである。

### <参考文献>

日本小児歯科学会 近畿地方大会

特別講演 「子供のアレルギーはなぜ増えたか」 藤田紘一郎先生

「笑うカイチュウ」 寄生虫博士奮闘記 藤田紘一郎「著」

